

---

# IS学園に転生者のスパイ

茶色のコート

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS学園に転生者のスパイ

### 【Nコード】

N3424BA

### 【作者名】

茶色のコート

### 【あらすじ】

IS学園に潜入して、いろいろするお話。 たぶん。



今の自分の容姿は……どう見ても赤ん坊です本当にありがとうございます。  
うございます。

そんなくだらないことを考えていると初老の男が部屋に入ってきた。

「ん？この子が起きている？まさか成功したのか！おい！だれか！  
成功だ！あの研究が成功したぞ！早く誰か来い！」

うるさいなあ。もうちょっと静かにできないのかよ。

「うるさいですよ博士。また私たちの班にクレームが入りますよ」

今度はやせた男が入ってきた。

この男も僕と同意見らしい。

「第一その研究は凍結されたんじゃないやなかったんですか？」

「馬鹿者！凍結ぐらいであきらめられるか！隠れて研究しておった  
のだ！みる！そのおかげで成

功したではないか！私の人造人間計画クローンが！これを国に見せれば  
私を馬鹿にした 下種どもを見返してやることさえできる！クハハ  
ハハハ！」

「それは本当ですか博士！……でも凍結された案件を発表するのはまずくないですか？」

「そんなことは後でどうにでもなる！ククク！これを見れば政府の下種どもがどんな反応をするのか楽しみだ！クハハハハハ！」

「だいじょうぶかなあ……」

「ほら何をやっている！報告に行くぞ！早くついて来い！」

一通り話をした後二人の男は部屋から出て行った。

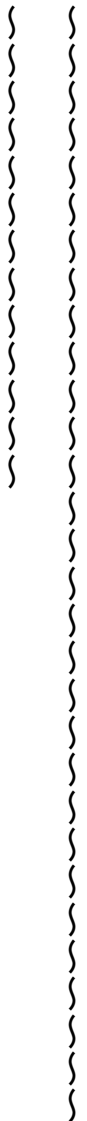
二人の話を聞く限り僕は人造人間計画クローンで作られた人間らしい。

そしてあの二人はどこかの国の研究員で、凍結になったこの計画を完成させたった今政府に報告をしにいったと。

なるほどなるほど。現実でこんな馬鹿みたいなことがおこつても案外冷静にいられるもんだ。

面白いな。なんか興奮してきた。向こうの自分がどうなつてるとかもうどうでもいいや。

今を生きるとしよう。あー眠くなってきた……。今何かできるわけでもないし、とりあえず寝てもいいや……。おやすみ……。



ふう。あいつらまたわしのことを馬鹿にしおって。いつか見返してやらなければきがすまん。

そんなことを考えながらわしは自分の研究室に入った。

・・・？何か視線を感じる・・・？

「ん？この子が起きている？まさか成功したのか！おい！誰が！成功だ！あの研究が成功したぞ！早く来い！」

まさか成功するとは・・・ククク

「うるさいですよ博士。またわたしたちの班にクレームが入りますよ」

わしの助手がきおった。優秀なやつだか口うるさいのが欠点だ。

まあそんなことはどうでもいい。いまはこのことを話さなくては！

「第一その研究は凍結されたんじゃないやなかつたんですか？」

またなまえきな口をききおって。また後で話す必要があるな・・・。



~~~~~  
~~~~~

僕が生まれた日から10年がたった。いろいろあったがまあどうでもいい。

今日はやっとこの研究室から出られるのだ。とても気分がいい。  
あ、博士が来た。

「おい、被献体1号！居るか！？」

僕は被献体1号という名前で通っている。

「はい、ここにいます。あとつるさいです。」

「クハハハ！気にするな！今からほかの研究所に行くぞ！」



「了解しました」

今まで体験してきたが、博士に反抗するところくなことがないので反抗はしない。

できるだけ博士の気分を害さないようにするのが一番いいとこの10年で学んだ。

博士は変なところで怒るから面倒くさいのだ。

「うむ！それでは行くぞ！ついて来い」

「了解しました」

どうやらこの研究所はドイツにあるらしい。

そして今から僕が生まれたのと同時期に生まれた試験管ベビーに会いに行く。

試験管ベビーとは僕のように人工的に受精されて生まれた子供のことを言うらしい。

あとこの10年間ですっと考えてきたことだが、この世界は前の世界とほとんど変わらないみたいだ。日本という国もあるしアメリカもある。しいて言うなら技術が多少前の世界より進んでいるように感じる。

さてどんな子なのかな？

## プロローグ（後書き）

これを書くのに1時間もかかってしまった・・・

## 銀髪の少女(前書き)

ラウラがかわいくて仕方ない・・・  
IS見始めた当初はシャルが好きだったんですけどね・・・

## 銀髪の少女

私の名前はラウラ・ボーデヴィツヒ。人工的に作られた試験管ベビーだ。

何時もは訓練や勉強などをしているが今日はなにもしなくていいらしい。

・・・あいや、あの偏屈博士が合わせたいやつがいるなどというていたな。

私と同じ試験管ベビーらしい。年は私と同じ10歳だったはず。同年代の子とあったことがないので実は楽しみだ。だかちゃんと話せる自身がない。

「ちゃんと話せだろうか・・・うう・・・」

まあなるようになるだろう。おっと、考えているうちに博士たちが来たみたいだ。

~~~~~  
~~~~~

歩くのって面倒くさいね。もう20分はかかってるよ。まさか博士は方向音痴なのか？

ああはやく会いたいな。いい子だといいな。それにしても遠いな。本当に迷ってるんじゃないのかと思えてきた。ちよっと博士に聞いてみよう。

「博士、後どれくらいでつくのですか？もう20分近く歩いているのですが」

「う、ううむ！わかっておる！もうつくから黙っておれ馬鹿者！」

あゝ、こりゃ迷ってるわ。どういことだよ。迷うなよ馬鹿博士め。。。

もちろんそんなことは言わない。言ったら海に沈められる。さすがにそれはないか。ははは。。。。

「おい。顔に出ておるぞ！」

「す、すいません・・・ははは・・・」

やばいやばい。なんか鋭いときがあるんだよな、この博士。

「まったく。ポーカーフェイスの練習も必要だな」

機嫌が悪くなるのはまずいので強引に話を変えることにした。

「博士、そろそろ僕の名前を決めていただきたいのですが？」

「うむ？名前？そんなもんわしがきめるわけなかつが。自分で決める阿呆が」

「りよ、了解しました」

名前だったってドイツの人名なんてわかんねーよ。ドイツの知ってる言葉はシュバルツしかしらねーよチクシヨウ。どうする？適当に決めるか？それともドイツの偉人とか有名なものからとるか？

もうドイツの偉人でいいや。ドイツの偉人って・・・ビスマルク？

まあそれでいいや。

「ではビスマルクにします」

「ビスマルク？ああオットー・フォン・ビスマルクか」

「はい。ほかに思いつかないので」

「あいわかった。いまからお前はビスマルクだ」

「了解しました」

よし、ビスマルクで決定だ。

お？あれが研究所かな？

「おお！研究所につけたぞ！やったな！もうちょっとでタクシーを呼ぶところだったわい」

「やっぱり迷ってたんじゃないですか」

「……黙れ」

「了解しました」

ふう。やっとつけた。お？あそこにいる子かな？めっちゃかわいいじゃん。

後なんか見たことあるような？……！ああ！ISのラウラじゃん！あれ？じゃあISの世界に転生したのか？

最高じゃないか。しかもラウラといきなり会えるとか。やべえ。

祈ったことなかったけど神様ありがとうございます。あ、もしもじしてる。

かわええええええええええええ。落ち着こう。落ち着け俺。

大丈夫。顔には出でない。普通に話せば大丈夫なはずだ！よ、よよよよよし！話しかけるぞ。

「何二人とももしもじしておる？早く自己紹介でも何でも済ましてしまえ！時間がもつたいないぞ？」

「わ、わかっています博士、えっと、僕の名前はビスマルク、君の名前は、何？」

相手が10歳なのでゆっくり話すことにした。にしてもかわいい。

「あ、ああ、私の名前はライ、じゃなくてラウラだ。よ、よろしくたのむ」



あ、舌嚙んだ。かわいい。もうこの子何をしてもかわいい。

「よし！じゃあわしは研究に戻るから今日はこっちの研究所にとめてもらえ！わかったな？」

「了解しました、博士」

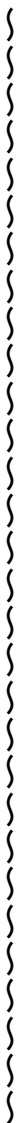
「うむ」 スタスタスタ

「じゃあラウラちゃん

」

その後も僕たちはかなりのあいだ話し合ったり遊んだりした。ラウラは同年代の子がいなくてさびしかったらしい。仲良くなっているという教えてもらったり教えたりした。

ラウラかわええ（´、`）



~~~~~

おっと、考えているうちに博士が来たらしい。

あ、横にちっちゃなヌイグルミみたいな子がいる。もじもじしてて、かわいいな。

「何二人とももじもじしておる？早く自己紹介でも何でも済ましてしまえ！時間がもつたいないぞ？」

わたしももじもじしていたらしい。すごく恥ずかしくなった。

「わ、わかっています博士、えっと、僕の名前はビスマルク、君の名前は、何？」

彼が話しかけてきた。ああ、声もきれいだな。よ、よし。

「あ、ああ、私の名前はライ、じゃなくてラウラだ。よ、よろしくたのむ」

舌をかんでしまった。死にたい。死にたいぐらい恥ずかしい。

「よし！じゃあわしは研究に戻るから今日はこっちの研究所にとめてもらえ！わかったな？」

「了解しました、博士」

「うむ」 スタスタスタ

「じゃあラウラちゃん

」

そのあと、私たちはかなりのあいだ話したり遊んだりした。いろいろ話したりしてとても楽しかった。彼はたくさん私の知らないことを教えてくれた。

同年代の子がいなくてさびしかった、また遊んでくれるか？といったら、笑顔でうなずいてくれた。

すぐくうれしかった。ビスマルク、よし、名前も覚えてし次にあったらこっちから声をかけてやるう。



## 銀髪の少女（後書き）

10歳のラウラの口調などを考えるのが面倒だったのでそのまんまにしました。

変に子供っぽくなるよりいいでしょう。

ちなみにもうわかってると思いますがヒロインはラウラです。

主人公の名前は考えるのが面倒くさかったというわけではけっしてありません。はい。

ちなみにこれを書くのに2時間かかりました。

疲れた……。

あと、感想ありがとついでいます。

とてもうれしかったです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3424ba/>

---

IS学園に転生者のスパイ

2012年1月9日03時49分発行